



ひきだし

藤原恭介

Artwork: Sae Yanagimoto

「ひきだし」

藤原 恭介

（第一話）

はじめまして。私の名前は「苗代^{なえしろ}ひなた」と言います。私がこれから話そうと思うのは、私の思い出に深く残る、大好きだった人の話です。でも、そんなに長い話にはならないと思います。彼は、昨年の冬に自殺したからです。

まだ二十三歳でした。私は彼と出会って、一年と五ヶ月を共に過ごしました。その彼との色々な出来事を、少しずつ話していきたいと思います。最初に出会ったのは、今から二年五ヶ月前のことです。季節は夏で、私はその時二十歳。私立の大学に通う学生でした……

日曜日の午前十時。今日、学校は休みだけど、私は写真部の部室に行くために大学に続く坂を上っていた。今は九月で、今日は特に暑い。この調子だと十二月にはどのくらい暑くなるんだろう。という昔ながらのボケが頭に浮かんだ。そんなことを考えながらも、一步一步坂を上り、部室にたどり着いた。

部室に入ると、四年生のトウルさんが耳にイヤホンをして雑誌を読んでいた。トウルさんは日曜日でもよく部室に居る。就職も決まってしまったから、きつと時間を持て余しているのだ。

「おう、おはよ」私に気づいたトウルさんは、イヤホンを外しながらそう言った。

「おはようございます。今日も早くから来てたんですか？」

「うん、昨日の夜から駅前ですつと飲んでね。家に帰る前に、ちよつと休憩しにさ」机には、コンビニで買ったと思われるエスプレッソコーヒーが置かれていた。

「あ、確かにそう言われてみると、眠そうな顔してますね」

トウルさんの目がいつもより少しくぼんで小さく見えた。

「もう俺も二十二歳だからね。十代の頃は一日のオールくらい何でもなかったのにさ」

よく耳にする言葉だ。二十歳を過ぎた学生は、皆この言葉を言いたがる。なぜ体力の低下を訴えたいのだろう。それにどう考えても、二十二歳なんて十分に若いだろう。そう思いながらも、大変ですねと笑って答えた。

「ひなたは、今日は何しに来たの？」

「私はこれから河原に行こうと思って、三脚を借りに来たんです」

「へえ、いいね。俺も付いていこうかな」

来ないでほしい。私は瞬時にそう思った。トウルさんのことは好きだし、いい人だけど、今日は一人でのんびりと好きなものを撮りたいのだ。

「でも、ちゃんと帰って休んだほうがいいんじゃないですか。昼過ぎにきつと辛くなりますよ」

「冗談だよ。俺だつてそこまで暇じゃないよ。でもこんなにすぐ断られるとは思わなかったな」

「あ、いえ……断ったわけではないんですけど」

不快にさせてしまっただろうか、なんだかこんなちよつとしたことで不安になってしまふ。私はとても気が小さいのだ。

「でもさ、河原ならこの前行つてなかった？」

私が戸惑っていると、トウルさんがそう聞いてきた。

「あ、はい。でも今は、彼岸花が咲いてるんです。それも撮りたいと思って」

そう。今はあの赤い彼岸花が河原にいっぱい咲いているのだ。別に特別好きなわけじゃないけど、河原の景色は基本、緑色か茶色しかない。九月になるとその中に、あの真つ赤な彼岸花が咲く。しかも自然に咲くのだ。それが私にはとても不思議なことに思える。子供の頃に父さんと河原を散歩していて、「この赤いお花は誰がここに植えたの？」と私が聞くと、お父さんは「ひなたを驚かそうと思って、お父さんが昨日の晩にこっそり植えたんだよ」と答えたのを覚えている。子供の私は、なんて素敵なお父さんなんだと、くだらない嘘を信じ、驚いたのだ。

「すみません。それじゃ三脚一つ借りていきますね」

私は部屋の隅に置いてある三脚を手を取った。

「ねえ、良いのが撮れたらまた見せてよ。ひなたの写真は、ひなたらしさがよく出てて面白いんだよ」

トウルさんはそう言って笑った。ホントにいい人だな。私は別に面白みのない人間だし、自分らしさなんて特に持っていない。とにかく、ついて来ないでほしいと思った先ほどの考えを、私は反省した。

「はい。ありがとうございます。頑張つて撮ってきます。トウルさんの写真もまた見せて下さ

いね」

私はトウルさんに別れを告げ部室を出た。そして坂道を下り、河原へと向かった。

十五分ほど歩いて河原に着いた。私がよく撮影しに来るのは、この水鳥橋という橋の周辺で、中学校がすぐ近くにあり。河川敷にはテニス部のコートがあつたりもする。

私は歩くのが好きだけど、さすがに今日は暑すぎる。私は橋の下に入り、影に座り込んだ。リュックから水筒を出してお茶を飲んだ。冷たいお茶が喉を通ると幸せな気持ちになった。お茶も十分に美味しいのだけど、私はふいにカルピスが飲みたくなった。ポーっとしながら頭上を走る車の音に耳をすませていた。十分ほど休憩し体力も戻り、ふと土手のほうに目をやると、一人の青年が土手の草の上に座り、向こう岸を眺めていた。

彼の背中は猫背で丸まっている。黒髪で、痩せ型だ。遠くから見る限り横顔は美しく、表情はどことなく寂しさが漂っていた。きつと向こう岸に、彼の愛する女性が捕らえられていて川の向こうの国には渡ることが出来ず、彼は寂しい目で恋人の安否を願っているのだ。

私がそんな子供のような妄想をしていると、彼が私の視線に気づいたのか、こっちを見た目が合ってしまった。

〈第二話〉

私の視線を感じたのか、彼はふいにこちらに顔を向けた。私は驚き、とっさに目をそらした。変な女だと思われたかな……でも彼はこっちにやってくる様子もなかった。ああ、良かった。しかし私は本当に気が小さい。もう二十歳だというのに、なにをこんなことで動揺しているんだろう。この先ちゃんと生きていけるのか、不安になった。まあとにかく、今日私は彼岸花を撮りに来たのだ。目的を実行すべし。

リュックから一眼レフカメラを取り出して、首にぶら下げた。彼岸花はどの辺りに咲いているんだろう。先ほどの彼のいる方には、何となく行きにくかったから、反対方向へ川沿いを歩いて探すことにした。

十分ほど歩くと、彼岸花が咲いているエリアを見つけた。鮮やかな赤色で、みんな同じくらいの背の高さだった。実際見つけると、想像していたよりも嬉しかった。一年ぶりの再開だ。撮る前に一度、いろんな角度から見たかったから、ぐるっと周りを歩いて回った。すると一つだけ、茎の部分が折られているものがあった。ぎりぎり皮一枚で繋がっていて、花の部分は下の草に顔をうずめている。学校帰りの中学生の仕業なのか、それとも散歩中の幼い子供の仕業なのか。分からないけど、どうせなら、完全にちぎってあげればいいのに。私はこのギリギリで繋がった彼岸花を写真に収めようと思った。あまり趣味の良いことじゃないかもしれないけど、立派に立っている周りの花よりも、こいつのほうが、私には魅力的に見える。そして私は、その折れた彼岸花を、何枚も色んな角度から撮り、そして撮り終わると私はそいつを、完全にちぎった。

はあ、それにしても今日は本当に暑い。日焼け止めを塗ってはいるけど、こんな天気の良い日にあまり直射日光に長く当たるのは、ちょっとこわいな。私はまたお茶を飲もうと思いいリュックの中に手をつっこんだ。手の感覚だけで水筒を取り出すのだ。ガサゴソガサゴソ……ええとこれは手帳。これは財布。これはポーチ。もつとつるつとしたもの。つるつとしたもの……あれ、ない。私は手探りで探索をあきらめて、直接中を覗き込んだ。しかし、やはりない。これはきつと、さつき休憩した橋の下に忘れたんだろう。そう思い、私は来た道に戻った。

橋の下に着くと、さつき土手にいたあの青年がいた。ちょうど私が座って休憩していた場所に立っている。そして彼の手には、なんと私の水筒が握られていた。どうしよう。声をかけても大丈夫かな。でも、あれは私のだし、大丈夫だよな。

「あの、すみません」

彼は振り向いた。初めて近くで見る彼の顔は、遠くから眺めた時の印象とは少し違った。しかしやはり、その表情は寂しそうで、美しかった。

「それ、手に持ってるの……」と、彼は言った。

いやいや、その台詞はこの場合、私が言う台詞ではないか。と心の中でつつこみをいれた。

「それ、左手のやつ。彼岸花でしょ？　ちぎってきたの？」

そう。彼が言ったのは、私がちぎって持っていた、彼岸花のことだった。無くした水筒に気をとられて、そのまま左手に握りっぱなしだったみたいだ。

「え、ああ、これはその、最初からちぎれてたんです」

彼は私の目を真っ直ぐに見ている。私は人の目を見て話すことが基本的に出来ない人間なのだ。挙動不審になっていないか心配になった。

「そう、じゃあ落ちてたのを拾ってきたんだ？」

「あ、いや、正確にはそうじゃないんです。茎の部分が折れてて、その、ぎりぎりくつついてたんですけれど、まあ……それをちぎったんです」

なんだろう。なんでそんなに詳しく知りたいんだろう？　怒られるのかな。

「そっか。もって帰って水に挿してあげるの？」

そう言った彼の表情は、優しかった。その表情に私も少し安心した。

「はい。そのつもりです」

「ねえ、もしよかったらさ、この水筒と、その花、交換しない？」

と、彼は妙な提案をした。いや、でもその水筒はもともと私の物だ。

「はい。でもその水筒私のなんです。置きっぱなしにしちゃって」

「うん。知ってるよ。君が置いて行ったのを見てたから。他の人に取られないように、君が来るまで、持ってたあげたんだよ」

「え、そうだったんですか？　ありがとうございます」

というか、私が置いて行ったのを見ていたのなら、その時点で声をかけてくれれば良かったんじゃないかと思った。けどそれは言わなかった。

「ねえそれで、その花もらってもいいの？」

「あつ、はい。いいですよ」

私達は、それぞれ手に持っていたものを交換した。

「ありがとう」と彼は言った。

しかし変な人だ、悪い人ではないと思うけど、変わった人だな。

「でもさ、こんなに赤くて、しかも大きい花が、河原に自然に咲くなんて、不思議だと思わな
くさ。」

お、驚きだ。まさかそんなマニアックなところで誰かと共感できるなんて、しかも知り合
つてまだ五分も経っていない初対面の人に。もしか彼はサイコメトラーか？ それとも詐
欺師か？ ちょっと不安になったけど、それよりもなぜか妙に嬉しい。

「はい。もうホントにそうですよね。私も、毎年この季節になると同じことを思うんです。不
思議だなあって。だから今日も、その為に河原に来たんです」

「へえ、まさか共感してもらえとは思わなかった。ところで君は、大学生？」

「はい。大学二年生です。すぐその大学です。大学生ですか？」

同じくらいの歳に見えたので、私もそう聞いてみた。

「ううん。違うよ。去年まではそうだったけどね」

「ああ、もう卒業されたってことですか？」

「いや、違う。辞めたんだ。ちょっと色々あってね」

「ああ、そうなんですか、それは、ええと……」

どうしよう。辞めた理由を聞いたほうがいいのかな。でも訳は言いづらいかもしれないし

「ああ、ごめんね、そんなに困らなくていいよ。別に大した理由じゃないんだ」

戸惑っている私に、彼は助け舟を出してくれた。

「いえ、こちらこそすみません。なんかいつもこんなので。ちなみに、通っていたのはどの
大学ですか？」

「早稲田だよ。一応ね」

「へえすごい。早稲田。じゃあ去年まで東京に住んでいたんですね？」

「うん。でもあまり好きな所じゃなかったけどね」

「そうですね。でも私も、特に行きたいとは思いませんね。東京には」

そこで会話はとぎれ、ほんの数秒の沈黙が訪れた。そして先に口を開いたのは、彼のほう
だった。

「ねえ、良かったら君の名前を、教えてくれない？」

「あ、はい。私は苗代ひなたつていいいます。名前、私も聞いていいですか？」

「僕は月宮 つきみや しんじ。苗代さんはこの辺に住んでるの？」

「『ひなた』でいいですよ。そうですね。まあここからだ歩いて十分くらいの所です」

「そっか。それで、今日は写真を撮りに来たんだ？」

「そうです。一応大学でサークルに入ってるんです」

「主に風景を撮ってるの？」

「いえ、基本的には何でも撮ります。でも特に、生き物を撮るのが好きなんです。動物とか」

「へえ、それはいいね。僕も動物は好きだよ」

「動物にも、色んな表情があります。知ってますか？ 撮っているとだんだん分かるようになってくるんです。もちろん、動物と喋ることは出来ないから、本当のところは分かりませんが、表情や行動から、色々と感じる事が出来るんです」

「すごいね。それはすごい特技だよ。ねえ、じゃあひなたさんに見せたい写真があるんだけど」

彼はそう言って、ポケットからスマートフォンを取り出して、ある画像を私に見せた。

「これは、猫ちゃんですね。月宮さんの飼っている猫ですか？」

綺麗な毛並みの、灰色の猫がそこに写っていた。

「僕も『しんじ』でいいよ。そう。僕の猫だよ。リンって名前。この表情はどうか？ この子はどんな風に見える？」

穏やかな表情に見えるけど、それだけじゃない。大切な人を見ている目ではある。それはきつと撮影しているしんじさんのことだろうけど、心の芯の部分には強い悲しみがある。そんな風に見えた。

「そうですね。とても立派な顔をしていると思います。でも、どこか悲しそうにも見えます。

何か逃れられない悲しみが目の前に迫っていて、その全てを理解した上で、なお笑っているそんな表情です」

私はそう言いながらも、内心驚いていた。あまりこんな表情の猫は見たことなかったからでも、当てずっぽうで言ったわけじゃない。本気でそう感じたんだ。

「実はこいつ、もう居ないんだ」

「えっ？」

「この写真は死んだ日に撮ったものなんだ。僕も何故だか分からないけど、その日はこいつが無性に可愛くて、一日中一緒に遊んでたんだ。これはその時に撮った写真」

「そうなんですか……」

「うん。だから、ひなたさんの言った事は当たってると思うよ。きっとリンは自分が死ぬことを知ってて、最後に、僕に付き合ってくれたんだ」

「どうして死んだんですか？」

「分からないんだ。突然死だったから。夜中に仕事を終えて帰宅した父親が、死体を見つけたんだ。よだれを垂らして、失禁してたらしい。確かにもう老猫だったけどさ。それにしてもあまりにも突然で、現実起こったことだと思えなかった。だって夕方までは一緒に遊んでいたのにさ」

そう話す彼の顔は悲しそうだった。可哀想に。まだ傷も癒えていないんだろう。

「あの、もしですね。もしよかったら……私の猫を見に来ませんか？」

「ひなたさんは、家で猫を飼っているの？」

「いいえ、違うんですけど、いつも夕方になると必ずやってくる野良がいるんです。餌をやっているうちにとっても懐いてくれるようになったんです。だから私の猫。私は勝手にそう決めて、名前も付けました。本人も、私にくれる餌が一番美味しいと言ってます」

「ひなたさんは、マジで動物と喋れるの？」

「いえ、何となくですよ。何となく。フフフ」

というわけで、しんじさんと私は、私の猫を見に行くことになった。

「ところで、その猫に何て名前つけたの？」

「『おかみ』です」

「なるほど……」

〈第三話〉

こんにちは。ひなたです。今回は出会いの話をさせてもらいました。二年五ヶ月前の夏。私としんじさんはあの河原で出会い、そして友達になりました。付き合ったりはしなかったけど、よく会って、色々な話をしました。というか彼は、ビックリするほど物知りで、私は一方的に話を聞いているばかりでした。今日話したいのは、あの河原の出会いから、三ヶ月が経過した十二月で、冬の真っ只中でした。そして、しんじさんの心の孤独が、初めて顔を出した日です。

「だから、何でそんなことが分かるんだよ。君は宇宙人か？」

彼は、全く理解できない様子で、私のことを不思議な目でみている。

「私は地球人の母と、地球人の父の元に生まれました。だから多分私も地球人だと思います。血もちゃんと赤いのが出ますし」

「じゃあなんでアイツが、僕に気があるって分かるんだよ」

彼は、檻の左奥の、チンパンジーを指差してそう言った。

「あの眼差しは、間違いなく、あなたに恋をしてる顔ですよ」

「でも、別に近寄ってこようとしなないじゃないか」

「きつと、恥ずかしいんですよ。お猿さんはとっても頭が良いですから」

そう。私たちは動物園に来ている。今日はなんだか無性にキリンが見たくなかったので、私としんじさんを誘った。

「今日は、付き合ってくれてありがとうございます。しんじさん。今日は、キリンとライオンと、象とシロクマを見ます。あ、レッサーパンダもいるんだ。こいつも見たい」

私は、園内マップを見ながらそう言った。久しぶりに来た動物園は、私を予想以上に興奮させた。

「ええと、じゃあまず、シロクマのところに行きましょう。ここから一番近いので」
私達は、マップを見ながら歩き出した。

「ねえ、しんじさんは、何の動物が一番好きですか？」

「僕は、猫だね。猫っていいのはあり？」

「んー、今回はなしにしましょう。動物園にいる動物の中だと、何ですか？」

「そしたら、さつき見たハイエナが良い」

「へえ、ハイエナですか？ どうしてですか？」

「初めて見たけど、結構可愛くて意外だったんだ。目なんて凄くつぶらで、今にも泣きだしそうな顔だった」

「確かに。可愛いかったですね」

「うん。それにハイエナは、噛む力が凄く強いんだ。ライオンよりも強いんだ」

「そうなんですか？ ライオンよりもずいぶん小さいのに、どこにそんなパワーがあるんでしょう」

「不思議だよ。ハイエナは、ライオンの残した餌も、骨ごと噛み砕いて食べるんだ。だから、サバンナを綺麗にしているのは、ハイエナなんだよ」

「よく知ってますね。どうして動物に興味ないのに、そういう事知ってるんですか？」

「さあね、多分どっかで聞いたか、本で読んだかだよ。僕は基本的に、一度覚えたことは忘れないんだ」

「ええ、うそお。ホントですか？ だから頭良いんですね。昔から勉強は得意だったんですか？」

「うん。まあそうだね。それなりにね」

「それなりってどのくらいですか？」

「それなりっていうのはそれなりだよ。どうしてそんなに知りたいの？」

「だって、早稲田に行った人だし、それに私は覚えたことすぐに忘れてしまう人なんです。だから、不思議でしょうがないんです」

「んー、まあ一応、テストはほとんど百点ばかりだったよ。小学生の時からずっと」

「うそ！信じられない。全然それなりじゃないし……勉強家だったってことですか？」

「とんでもない。勉強なんてろくにして無かったよ。普通に授業を受けてるだけだったよ」
はあ。ため息が出る。才能とは凄いものだ。私なんか今でも、テスト一週間前になってから必死にやっつて、いつもギリギリなのに。きっと彼は、大学を辞めた理由も、勉強とは関係ないんだろうな。天才は変わった人が多いって聞くから、彼もそうなのかな。

「凄いなあ。全然理解できないや。ちよつとでもその才能を分けて欲しい」

「人は誰だって何かの才能を持つてるものだよ。それよりほら、もうシロクマのところに着いたよ」

「あ、ほんと」

私がボーっとしてる間に、もう目の前にシロクマがいた。

「ああ、なんかうなだれてますね。暑いのかな？」

「うん。暑そうな顔してるね。動く気配が全くないし」

「そうですね。だってホントは北極にいるはずでもんね。彼らは。故郷が恋しくなったりしないのかな」

「それは、君なら分かるんじゃないの？」

「今のところあの表情からは、そういったものは感じませんね。左の内ももが痒いけど、少し場所が遠くて、搔くのが面倒くさいそうです」

「なんて怠け者なんだ。まあでも彼のせいじゃないよな。檻の中で定期的に餌をもらっていただけの生活をしてたら、誰だってそうなるか」

「でも、可愛いですね。人間の怠け者は嫌われるのに、動物なら、どうして愛されるんでしょうね？」

しんじさんは、それに対して何も答えなかった。何か別のことを考えていたんだと思う。

「次のところに行きますか？ しんじさん」

今度はちゃんと返事がほしかったから、名前も呼んでみた。

「うん。良いよ。じゃあ次は象だね。象を見て、次にキリンだね」

私達は再び歩き出した。するとしんじさんが、突然こんなことを聞いてきた。

「動物の気持ち分かるのってどうなの？ 分かることによってガツカリすることはないの？」

「そうですね。でも私は生まれたときからそれが普通なので、別に特に困ることはないですよ」

「でも、猫なんて気分屋でしょ？ 餌をあげても懐いてもくれない時とか、気持ちが分かって嫌じゃないの？」

「はい。まあ猫はそういう動物ですから。確かに、私達が遊びたいと思った時に限ってそっぽ向くものです。だから、そういう時は私も我慢します。そしたらそのうちあっちから、遊ぼうと声をかけてきます。そしたら遊べばいいんです」

「そうか。そんな感じなんだね」

「はい。それに、猫だって人間のことを愛していますよ。猫は犬と違って懐かないと言う人もいますが、それは間違いです。私たちが寂しいとき。猫はそれを感じることが出来る動物です。部屋で一人ボーっとしていると、リンちゃんは、寄って来てくれることはありませんで

したか？」

「うん……あつたね。両親も友達も、誰も僕のことを気にしていない時でも、リンは来てくれたね。そういえば、そうだった」

そう言ったしんじさんの顔は、口だけが横に伸びて、目が笑っていない。何かに対して失望しているような表情だった。それに今の言い方は、何か引つかかる言い方だった。

「リンちゃんのこと、今でも思い出したりしますか？」

「するよ。夢にも出てくるし。でもそんなに、ひどく悲しいってわけでもないよ」

「そうですか。それならいいんです。何か今、すごく悲しそうな顔に見えたので」

「え、僕が？ どうして？」

「いえ、その、さっき、両親が自分のことを気にしてないと言ったのが、ちょっと気になったんです」

彼は、ピタッと歩みを止めた。そして私の顔を見た。

「うん。確かに言ったね。でもそれはただ事実を言ったただだよ」

「事実……ですか？」

「うん。そんなに珍しいことでもないと思うけど」

「どうしてそう思うんですか？」

私は彼の心に近づきたかった。だからそんな質問をしてしまった。確かに少し調子に乗ったことは認めるけど、ただの好奇心で聞いたわけじゃない。

「そう思うからだよ。他に何て言えばいいんだい？ 親の顔や行動を見ていれば分かるさ」

その言い方は、少しきつかった。

「いや、でしたらその、両親のどんな行動を見て、そう思ったんですか？」

「なかなかしつこいね。君は一体なんだい？ カウンセラーにでもなったつもり？」

「いえ、別にそんなつもりじゃないですけど、ただ気になったので」

「そんなに短時間ですぐに話せるようなことだと思おう？ それに君に話したからってどうなるんだ？ 人の悩みは何だっけ解決出来ると思ってるようだね」

「そんな。どうしてそんな風に言うんですか？」

「僕は動物の気持ちは分からないけど、人の気持ちは分かるんだ。君の顔は今、明らかに僕のことを見下してる顔だったよ」

シヨックだった。こんなこと言われたのは初めてだ。でも、それ以上に心配になった。彼はどこか悪いのかもしれない。

「それは……誤解です。私は心配だっただけです」

「そうかな……」

そう言うと、彼は再び歩き出した。その後しばらくはお互いに喋らなかつた。私が何か話すべきだったかもしれないけど、言葉を発する勇気がなかつた。

私達は五分ほど無言で歩いた。こんなにも長い五分があつていいのか、というくらい長かつた。もうすぐ、象のいるエリアだつた。その少し前でしんじさんがやつと口を開いた。

「ねえ、知ってる？ 象はお葬式をやるんだ。仲間が死んだら、その亡骸に枝や花を添えたりする。その骨を拾い上げて抱きしめたりもする」

「へえ、そうなんですね！ 知りませんでした。ホントに何でも知ってるんですね」

私は、さっきのことなど、もう一切気にしていませんよという感じで、取り繕つて答えた。

でもきつと不自然だつたらう。こういう時は、どうやつたつて不自然になつてしまうものだ。「きつと象にも分かるんだよ。こいつとはもう会えないつて。違う世界に行つてしまつたんだつて」

「でもそれが理解出来るのは、素敵なことですね。象は感情豊かな生き物なんですね」

「うん。そうだね。それに、人間にもまだ、良いところが少しはあるつてことだ」

「どういふことですか？」

「だつて、人間なんて汚い生き物だろ？ マトモな行いなんてほとんど出来やしないんだから。でも、象と同じように葬式をするんだ。あの美しい象と同じことが出来るつてことは、ただ動物としての価値がちよつとはあるつて事だよ」

こんなことを突然言い出した。やっぱり私のさっきの態度が、彼の中の押しではいけないスイッチを押してしまつていたんだらう。そしてまだ、そのままになつてゐるんだ。

「人間は、自分達が万物の長だと思つてゐるんだよ。そのいやらしさを隠す為に、『良心』だなんて、ありもしないモノの言葉が生まれるんだ」

「確かに、汚い人間もいますが、善人もいると思ひますよ」

私は怯えていた。それを悟られたくないから、またそんな反抗的なことを言つてしまつた。「へえ、そう。じゃあ善人つていふのはなんだい？ まるで、人間は善悪の別がつく生き物だつて、前提したような言い方だね」

彼の口調が、また強くなつた。

「はい。私はそう思つてますよ」

私は本物のバカだ。自分が嫌いだ。そんな事言うなよ。でももう遅い。また彼は足を止めた。さつきと同じ。戦闘態勢だ。

「分かった……じゃあ聞くけど、象は感情豊かな生き物なんだよね？ 君はさつきそう言ったね」

「はい」

「その感情豊かな象を含め、様々な動物の生活を奪い、檻に閉じ込めてるのは誰だい？」
「人間です」

「そうだね。人間は退屈が嫌いなんだ。食べて眠るだけじゃ満足できないんだよ。だから、こうやって娯楽の為に平気で酷い事もするんだ。それで、今日僕達はお金を払って、その捉えられている動物達を見てまわったんだ。ただ、楽しむだけの理由でさ。それとも君は、さつきチンパンジーを見てる時に、どうにかして助け出そうと考えたりしてた？」

「いえ、していません」

「どうしてしなかったの？ もしかしたら彼らは檻の中から、心優しい誰かが助け出してくれる日を待ち望んでいたかもしれないのに。でも僕達は、無駄話をして通り過ぎただけ。彼らの目にはどう映ったかな。僕達は善人だったかな？」

どうすればいいんだろう……もう聞きたくない。イヤだ。

「例えばさ、勇気ある誰かが、大義を持って彼等の檻の鍵を開けてやったとしよう。そうすると、その人は次の日新聞に載って、頭のおかしい人として処理される。皆にとんだ迷惑な野郎だと言われる。そしてその人も檻の中に放り込まれるわけだ。ねえ、僕の言うこと分かるかな？ 僕達が生きる社会は、僕達だけのものなんだよ。僕達は全てのルールを受け入れないと生活出来ないようになってるんだ。しかもそのルールっていうのは、僕達と同じ生物の、人間の決めたルールだよ。別に神様が決めた訳じゃない。まあ神様だって、人間が都合良く創り上げたルールの一つかもしれないけどね。ルールを正しいと信じ込ませるためには、それらしいシンボルがあった方が良いんだ。バカを洗脳しやすいからね」

もう許して欲しい……私は彼に、そんなに悪いことをしたのかな。

「そして神様を掲げた集団は、違う神様を掲げる集団と戦って、勝った方の集団のルールが次の世代に引き継がれていく。僕達が生まれるずっと前から繰り返されて、次々とルールは変わってきた。そして僕や君は、たまたまこの時代の日本に生まれた。そしてこの時代のル

ールが正しいと教えられて育った。ほとんどの人は疑いもせずに従っているよ。ただそれだけの事だ。じゃあ次は、君の言う善人の話をしてくれよ。僕が理解できるように頼むよ」
「わ、私は、そんな話をするつもりはありませんでした。ごめんなさい。気を悪くさせてしまったのなら、謝ります」

私は、もう少しで泣きそうだった。なんで、こんなことになったんだろう。

「そう……そうなんだ。うん、分かった」

彼は、興奮して少し息を切らしていた自分を、落ち着かせようと、深く呼吸をしている。

「私は、私はただ……しんじさんの事が、知りたかっただけなんです」

目に涙がにじんだ。零れはしなかったけど、彼にもちゃんと見えたと思う。だって彼は、急に謝りだしたから。

「いや……違うんだよ。ごめん。違うんだ」

彼は、辛そうに目をつむり、左手で頭を押さえた。

「いや、ホントにごめんよ。こんな事言うつもりじゃなかったんだ。でも、こうなると自分でも止められないんだ。ごめんよ。ホントにごめん」

彼は、さっきまでの姿がウソだったかのように熱がひいてしまった。私はまだ怖くて、どうしていいのか分からないでいる。

「いえ、大丈夫です。ちょっとビックリはしましたが、大丈夫だと思います」

「ごめん。ごめんよ……僕はこうなると、どうしても歯止めが利かなくなるんだ。いつだってこんな風に、誰かに嫌われていくんだ」

「大丈夫です。嫌いになんて……なりませんよ」

すみませんが私も、今は少し嫌いです。と、ホントはそう言いたかった。でも、私の理性が、言うんじゃないと引き止めてくれた。それで良かったと思う。

「せっかくの動物園を、ダメにしちゃって……」

「いいんです。また来ますから。でも、とりあえず今日は出しましょう」

私は、これ以上まわったところで、楽しむことが出来ないことは分かっている。だからそう言った。

「うん……ごめん」

彼も同じ気持ちだったみたい。私達は動物園を出て車に乗った。私が車を運転している間、彼は助手席に暗い顔で座っていた。そして私に、何度も謝り続けた。多分、帰るまでに百回は謝ったと思う。

〈第四話〉

初めまして。僕の名前は、月宮しんじ。今日はひなたさんに代わって、僕がお話をさせてもらうよ。ガツカリさせてしまったならごめん。多分、前回の話で、僕のことを嫌いになった人もいると思うし。僕だって、あんな事急に言い出す奴がいたら、嫌いになると思うよ。みんなの気持ちは察しているつもりだけど、でも、僕はホントに反省しているんだ。彼女にあんな事言ってしまった自分が、今は恥ずかしくてたまらない。まあ……いいや。言い訳はここまですべて、本題に入るよ。

これは、僕が小学生の時の話。十歳だった。あるクラスメイトと喧嘩した時の話なんだ。そいつはあつしって名前なんだけど、とても太っていて、多分僕の二倍は体重があるんじゃないかな。大げさに言うかね。

ある日あつしは、僕の机に凶工のノリをベターっと付けたんだ。あつしは、前からよく僕にイタズラをしていた奴で、僕はいつもやられてばかりいた。その今までのこともあって、その日は仕返ししてやろうと思って、僕もあつしの机にノリを付けてやった。まあ僕も少しばかり気が大きくなっていったんだ。子供って時々、理由もなくそういう時があるだろ？ したら、あつしは怒って、またやり返してきた。しかもさっきよりもタツプリの量のノリを、また僕の机に付けたんだ。多分、普段やり返さない僕がやり返したから、腹がたったんだと思う。僕も負けちゃダメだと思って、またやり返した。そしたらあつしは、今度は机じゃなく僕のイスやランドセルにまでノリを付けたんだ。

僕はホントに腹がたって、あつしの頭を叩いたんだ。そしたら次の瞬間。あつしは僕の髪の毛を掴んで、無理やり転ばせた。そして、髪の毛を掴んだまま机の角に、僕の顔を何度も叩きつけた。僕は唇から血が出ていた。でも不思議と、痛いって感覚はあまりなかったんだ。ただ、あまりに急だったから、何が起こっているのか把握出来てなかったんだと思う。五回くらい叩きつけられたところで、見ていた友達がさすがに止めてくれた。あつしは舌打ちをして、僕を床にポイッと捨てた。そして自分の机に戻って、僕の付けたノリを拭き始めたんだ。

僕は、とりあえず廊下に出て、水道水で血を流した。それから屋上に続く階段のところに行き、そこに座り、ため息をついた。そしてティッシュで、唇の血の出るところを押さえていた。誰もいなくなつてホツとしたせいで、やつと涙が出てきた。もう十歳だったし、人前で泣くことは我慢していたんだ。ホントに、人に見られなくて良かったよ。やつぱり、やり返したりするんじゃないかった。こんな痩せつぼちの僕がケンカして、勝てる見込みなんてなかったんだから。

その日の夜。家で夕食を食べていると、母さんがあつしの話をしだした。あつしの母さんと僕の母さんは、仲良しなんだ。

「あつし君の家は両親が離婚していてお父さんがいないから、お母さんが仕事をしていて、朝早く出掛けるそうよ。だからあつし君はいつも一人で起きて、自分でパンを焼いて食べて学校に行くそうよ。えらいねえ」

僕は、そうなんだと言つて、あとは何も言わなかった。母親に今日のことを話したら、あつしの事を嫌つて、僕の味方をしてくれるだろうか。そんな事を思つたけど、ケンカしてポコポコにやられたなんて言えなかった。そう。母親っていうのはいつも、肝心な事には気づかないものなんだよ。子供はいつも、学校で楽しく平和に過ごしていると、思い込んでいるんだ。僕はテストではほとんど百点しか取らなかったから、母親にとって学校での心配事なんて、なに一つなかったんだよ。まさか、まだ小学生のわが子が、血が出るまで叩きつけられているなんて想像しないよね。当たり前だよ。せつかく忘れかけていたのに、母さんのせいで、また昼間の恐怖が戻ってきた。目を閉じてゆっくりと口の中の物を噛んだ。

「しんじ。あんた、その唇どうしたの？」

僕の唇の傷に気がついた母さんが、そう聞いてきた。

「ドッジボールで顔にくらったんだよ」と言った。

もともと決めていたんだ。聞かれたらそう言うつて。でもそう言ったあと、悲しくて仕方なかったな。もっと大きさに、顔の形が変わるくらいやられていたら、きっと母さんも心配して、もっとしつこく訳を聞いてくれたかもしれない。

それから中学生に上がつても、僕があつしにやられた話は、みんなの笑い話だった。色々な友達によく、その時のことを話せよつて言われた。面倒くさいつて断ると、あつしを連れて来るぞつて言われるから、断れなくなつたんだ。だから僕は、もう全然気にしていないつ

て顔で、話してあげたんだ。飽きるほど何度もね。そしたらみんな、同じように笑うんだ。僕が弱すぎるってさ。そして僕は中学校でも、あつしによくイジメられた。多分、向こうは遊びだったと思うけどさ。でも僕はもう、やり返したりしなかった。一度もね。やり返したって良いことなんてない。僕は一度覚えたことは忘れないんだ。

人がキレた時のあの恐怖を、絶望的な経験を、もう忘れることは出来ない。勉強が出来ても、スポーツが出来ても、女の子に人気があっても、関係ないんだ。髪の毛を挿んで振り回されると、全部意味なくなる。ただの可哀想な奴になっちゃうんだよ。暴力ってそういうものなんだ。

そうして僕は中学を卒業して、高校生になった。その頃には、友達のをほとんどを嫌いになっていた。

そして大学生になり、東京に出て一人暮らしを始めた。地元の友達と顔を会わせることがなくなり、嬉しかった。でもその頃にはもう、人間そのものが嫌いになっていったんだ。誰に対しても適当に笑って、相手の言って欲しそうなことだけを言うようにした。それなのに、誰からも好かれなかった。どうしてだろう。

そんな事を続けていたら、ある日生きることが嫌になって、学校に行く意味も分からないから、行かないことにした。

部屋で一日中寝て過ごす日もあった。でも、眠れない日もあるから、病院で睡眠薬をもらったんだ。ある日、あまりに眠れないから、睡眠薬とお酒を、いっぺんにたくさん飲んだ。本当はそんなことしちやダメなんだけど、どうしても、眠りたかったんだよ。

そして目が覚めると、僕は病院のベッドにいた。僕の母親が、ずっと僕にメールや電話をしていたらしいんだけど、僕は携帯電話の存在を忘れていて、充電が切れたまま、何日も放置していたんだ。それでついに、心配した母親がアパートの大家に連絡して、様子を見て欲しいって頼んだんだ。それがたまたまその日だった。母親の勘は鋭いもんだね。母さんは、目を覚ました僕を見て泣き出したから、死ぬつもりはなかったんだと、ちゃんと説明した。眠りたかっただけなんだと、そう言ったけど、母さんを泣き止ませる事は出来なかった。

とにかく、僕はそれがきっかけで地元の岡山に帰ることになった。そしてもちろん、大学も辞めることになった。父さんは休学にしたらどうだって言ったらしいけど、母さんが、もう何処にも行って欲しくないと行って、父さんもそれに応じたんだ。

僕の思い出話は、これで終わり。こんな話を最後まで聞いてくれて嬉しいよ。何でこんな話をしたかっていうと、実はこの前、この話をひなたさんにしたんだよ。今、君に話したのと同じようにさ。僕は今まで、自分からは誰にも話さなかったけど、初めて人に話した。自分の情けない話なんて普通は黙っておきたいけど、でも不思議と、そういうのを打ち明けたくなる相手なんだ。このひなたさんって人は。

僕は彼女の前だと、自分が十歳の子供のように感じるんだ。ひなたさんは、最後まで真剣に聞いてくれたよ。全部話し終わった後には、色んな優しい言葉もかけてくれた。あの時の顔は、忘れられないな。

〈第五話〉

どうも。ひなたです。今日話したのは、しんじさんとの出会いから約一年が経過した時の話です。私は大学三年生になり、再び夏が訪れていました。写真部の先輩にユキさんという人がいます。彼女は本当に素晴らしく魅力的な人で、私の憧れる大好きな先輩です。

二限目の「宇宙の科学」の授業が終わり、隣にいるユキさんが私に言った。

「ねえ、ひなた。今日は三号館の食堂で食べよ」

「はい。良いですよ。今から行っても席取れるでしょうか？」

「ちよつと早く終わったから、大丈夫じゃない？」

そう言いながらユキさんは、ノートと教科書をバッグにしまうと、持ち手のところを肩にかけて立ち上がった。私もリュックサックを背負って立ち上がった。ユキさんは、写真部の先輩である。しつかり者で明るくて、みんなユキさんのことが好きだった。今は四年生で、まだ就職が決まらずに探している。よく友達と、その話をしているのを見かける。この「宇宙の科学」の授業は、たまたま一緒になったから、いつも一緒に受けている。

食堂に着くと、私はアジフライ定食を注文した。ユキさんはパンとコーヒーだけだった。コーヒーを一口飲んだユキさんは、ふうとため息をついた。

「ああ、もう、ホントに最近暑すぎると思わない？」

「はい。毎日暑いですね。まだ秋までは、結構ありますしね」

「生き残れるかなあ。プールか海に行きたいな。ねえ、今年はもう海に行った？」

「はい。一応、つい先週に行きました。海といっても砂丘ですけど」

「えー、そうなんだ。一人で行ったの？」

「まあ、一人ではないです」

私がそう言うとユキさんは、ニヤリと怪しげな笑みを浮かべ、目を細めて私を見た。

「へー、そうですね。一人じゃないんですか。じゃあ誰と行ったのかな？ 最近よく、ひなたがイケメンの男の子と歩いているのを見かけるって聞くけど、その人なのかな？」

きつと、ユキさんのこういうお茶目なところが、みんなから愛される理由なんだろうな。「はい。そうですね。その人と行きました。というか、もうみんな知っているんですか？」

「うん。みんな話してたよ。だってあのひなたが、男と歩いてたんだもん。いつもブーツとしていると思ってたけど、なかなかやるじゃない」

「いえ、でも別に付き合ってる訳じゃないんです。よく一緒に出掛けたりはしますけど」

「あ、そうなんだ。でもどうなの？ 良い感じではあるんでしょ？」

「んー、なんか、よく分からないんです。とても不思議な人で、そういう話になる気配が全くないんです」

「そっかあ。ひなたはどうなの？ 付き合いたいの？」

「どうですかね。でも今のままでも楽しいし、特に不満はないんです」

「何言ってるの。そんなのダメだよ。一緒にいて楽しいってことは好きなんですよ？ しかもせっかくイケメンなんだし、頑張りなよ」

「でもホントに不思議な人で、何で私なんかと仲良くしてくれているのかも、よく分からないんです」

「そういうあんたも、十分不思議な子だから、相手も同じように思ってるんじゃない？」

「はあ、なるほど」

「うん。そう思うけどね。その人はこの大学の人の？」

「いえ、違います。早稲田大学に行ってたんですけれど、今は塾講師のアルバイトをやっています。かなり頭がいい人なんですよ」

「えー！ インテリでイケメンなんだ。ますます素敵じゃない！ 良いなあ、羨ましいなあ」

ユキさんは目を輝かせながらそう言った。感情表現が豊かで、よく子供みたいな喜び方をする。ホントに可愛い。もし私が男なら、こんな女の子を好きになると思うな。

「じゃあ、何か進展があったら教えてね。それに何か力になれる事があれば、私でよかつたらいつでも言ってるね。ああ楽しみだなあ」

どうすればユキさんと付き合えるか、私はもうちょっとで聞くところだった。危ない。しかしなんて可愛い人なんだろう。今、ユキさんと二人で昼食をとっている事が、とても特別な事に思えた。

「ありがとうございます。困ったことがあれば、一番に相談しますね」

「うん。任せて！ いつでも言ってきてね。ひなたならきっと大丈夫だよ。こんな良い子なかなかないんだから」

ユキさんは、そう言って私に微笑んだ。これは反則だ。私だってイチコロだ。やつぱりどうすればユキさんと付き合えるか聞こうと思ったけど、いやいや違うぞと、頭を横に振った。

「どうした？ 大丈夫？」

「あ、大丈夫です。ちよつとめまいがしまして」

「そうなの？ 体調でも悪いの？」

「いえ、幸福なめまいなので、お気になさらず」

「こ、幸福？ ちよつとよく分からないけど、まあ、大丈夫なら……」

私達は昼食を食べ終えた。そしてユキさんは、その日はもう授業が無いそうなので帰宅した。

私は、次の授業がある七号館に早めに行つて、席に座っていた。早めに行つた方が、教室の後ろの方に座れるからいいのだ。この考え方自体が、大学生としてどうなんだと思われるかもしれないけど、ちゃんと起きているし、ノートもとっているから、まあ、見逃してほしい。私は授業が始まるまでの間、何となくユキさんのことを考え始めた。ユキさんには、五つ離れたお兄さんがいた。でも、お兄さんは二十四歳の時に、白血病で亡くなった。わたしはあまり詳しくはないけど、急性の白血病だったらしく、発覚してからたったの二ヶ月で亡くなったそう。私はユキさんから直接聞いたわけじゃなく、ユキさんの仲の良い友達から聞いた。きつとその時は、ユキさんも凄く悲しんだのだと思うけど、私はユキさんの元気のない姿を見たことがない。私は、ユキさんが泣いているところを想像してみた。すると、安っぽいドラマのワンシーンみたいに、病室のベッドの横の椅子に座り、シクシクと泣いている姿が浮かんだ。こんな感じだったのかな。私はそう考えているうちに、ユキさんがとても遠い存在に思えて仕方なくなった。多分、不幸な経験をもつユキさんが、悲劇のヒロインみたいで、羨ましかったのだ。

私はなんだか、心底自分が嫌になった。私はいつからこんな人間になったんだろう。小さい頃から劣等感は一倍あったけど、それが何年も続いて、こうなってしまったのかな。あのユキさんが、私の恋の相談を聞いてくれていたなんて、さっきの事が夢だったみたい。また一緒にご飯食べてくれるかな。次は私も、パンとコーヒーにしてみようかな。

私はその日の夜。ベッドに入ってもなかなか寝付けなかった。頭の裏側に、私を嫌うもう一人の私が、いつまでも居座っていた。そしていてもたってもいられなくて、しんじさんに電話をかけようと思った。まだ、十一時だし、起きていてもおかしくない。手を伸ばし、ベッ

ドの下のスマートフォンを取った。しんじさんのアドレスを開いて、番号をタッチした。画面に『月宮しんじ』呼び出し中、と表示された。

「はい。もしもし。どうしたの？」

しんじさんはすぐに出たので、少し驚いた。

「あ、すみません突然。まだ起きていたんですか？」

「うん。今、生徒の資料を作ってる」

しんじさんが今やっている塾講師のアルバイトは、家に帰ってもやるが多いらしく、いつもとても忙しそうにしている。

「あ、そうなんですか。別に用はないんですけど……でも、忙しそうなので、また今度掛け直します」

「いやいや、別に大丈夫だよ。これはそんなに急ぎでもないし、僕もちょうど休憩しようと思ってたから」

「ホントですか？」

「うん。ホントだよ」

「じゃあ、すみませんが、ちょっと、適当に付き合ってもらっていいですか？」

「うん。もちろんいいよ。今日は学校だったんでしょ？」

「はい。学校でした……」

「今日は授業以外に何かして来たの？」

しんじさんはとても穏やかな声で、質問を投げかけてくれる。それなのに。

「ええと、そうですね……何したっけ……」

私は何を話すか全く考えてなかった。しんじさんの声を聞いたら気が抜けてしまった。

「あの、今日は……ユキさんっていう写真部の先輩がいます、その人と食堂でお昼ご飯を食べたんですけど、その……その人があまりに可愛くて、ご飯がちゃんと喉を通らなかつたんです」

私は何を言っているんだろう。こんな話をされるしんじさんの立場も考えなさい。

「ハハ、面白いね。そうなんだ。でも学校の食堂なんて、すごく懐かしいな」

こんな話でもしんじさんは笑ってくれる。そこでふと思い出した。私が食べたアジフライ定食と、ユキさんが食べたパンとコーヒーのことを。

「すみません。ちょっとヘンテコな質問ですけど、しんじさんは、アジフライ定食か、パンとコーヒーのセットだと、どっちが好きですか？」

「ん？　どうかな。まあパンの種類にもよるけど」

「いえ、そんなに真剣に考えなくていいんです。何となくのイメージでいいので」

私は妙にドキドキしていた。こんな意味不明な質問をするんじゃないかと、少しの後悔の気持ちもあった。

「んー、じゃあ僕は、アジフライ定食の方が好きかな」

「え、ホントですか？」

「ホントだよ。そんなに驚く事かな？」

「ま、まあ確かにそうですね」

「うん。それに、そっちなんでしょ？」

「え？」

「アジフライ定食を食べたのが、ひなたさんでしょ？　コーヒーとパンの方が、ええと、ユキさん。だっけ？」

私は、なぜか少し泣きそうになった。

「どうして、分かったんですか？」

「まあ、ひなたさんは、お昼ご飯はちゃんと食べそうなイメージだし、パンとコーヒーだけで済ませるイメージもなかったから」

「でも、アジフライ定食を食べる子よりも、パンとコーヒーを食べる子の方が、可愛いと思いませんか？」

「うーん。まあそっちの方が、スマートではあるかもしれないね。でもそんなのじゃお腹は膨れないよ。パンとコーヒーだけっていうのは、昼食を済ませるって感じだけど、定食となると、ちゃんとお腹を満たそうとしてる感じがする」

「ああ、そうか、確かに。そう言われるとそうですね」

「うん。それに僕なら、パンとコーヒーだけの人と、お昼ご飯を食べたいとも思わないね」

こんなバカバカしい質問にも、理解を示し、真剣に考えて答えてくれるしんじさんが私は好きだ。こんな人は何処にだっているわけじゃない。

「でも、何かひっかかる事があるの？　こんな時間に急に電話してくるなんて、初めての事だよ」

「はい。その……ホントに、特に何かあった訳じゃないんです。ただ今日学校で、そのユキさんとお昼ご飯と一緒に食べたんですけど、ユキさんはとても可愛くて、明るくて、みんなから愛されている人で、その人と一緒にいると、自分の事が凄くちっぽけな存在に思えてしま

うんです。そして、どうして私はこんなにつまらない人間なんだろうって、自分がなんか空しくて」

「そっか。でも、そんな事気にする必要はないよ。その人はたまたま、多くの人から愛される才能を持っていたってだけだと思うよ。それに、中にはその先輩よりも、ひなたさんの事を尊敬している人がいると思うよ。僕と同じようにね」

「え、そんな、まさか」

「十分あり得る話だよ。パンとコーヒーよりも、アジフライ定食を食べる子の方が好きな人もいるさ。僕も、そっちの方が素直でいい子に思えるけどね」

「素直……ですか？」

「うん。僕は、ブランド物のバッグよりも、リュックサックの方が好きだし、R&Bよりもロックの方が好きだ。全く悪口を言わない人よりも、悪口もいくらか言う人の方が好きだ。そして、自信満々の人よりも、自分の魅力を知らない人の方が好きだね」

私は、たまらなく嬉しかった。この言葉を言ってもらいたくて、電話したのかもしれない。しんじさんは魔法使いだっただんだ。

「僕に本物の安心感を与えてくれるのは、いつもそういう人なんだよ。聞いている？」

「……聞いています。ありがとうございます。あの河原で、しんじさんに出会えて良かったです。橋の下に水筒を忘れて良かった」

「ハハハ、そう？　僕は思った事を正直に言っただけだよ。少しは役に立てたかな？」

「はい。とても。実はずっと寝付けなくて、何か無性に寂しくて、しんじさんと話したかったんです」

「そう。もっと早くかけてくれたら良かったのに」

「ホントに、そうすれば良かった」

しんじさんに電話して良かった。まさかこんなに楽になるなんて思わなかった。ちょっとでも気が紛れたらいいくらいに思っていた。

「ホントに、急な電話に付き合ってくれてありがとうございます。もう、ちゃんと眠れそうなので、寝てみますね」

「うん。僕も続きをもうちょっとやったら寝るよ。もし、また何か困ったら電話してね。この電話をきった五分後だって構わないよ」

「フフ、ありがとうございます。じゃあ、おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

そして私は眠った。夢は見なかった。とても深い眠りだったから。

〈第六話〉

こんにちは。ひなたです。今日は、私としんじさんが出会ってから一年と三ヶ月が経過した頃の話です。夏も秋も終わり、季節は冬でした。出会ってそんなにも経つのに、私達は相変わらず恋人関係にはなっていないませんでした。今思うととても不思議です。でもあの時はそれが当たり前だったんです。しんじさんと会っている時はいつも楽しくて、その時間というのは、私達が友達だろうと恋人だろうと関係なく、私に、いつも同じように、生きる喜びを与えてくれる時間でした。だから私は満足でした。ずっとこんな日常が続けばいいと、思っていました。

その日は、駅前のカフェでしんじさんとお茶をしていた。私は学校終わりで、しんじさんは塾講師のアルバイトに行く前。空いた時間に少しだけ会うことにした。しんじさんは、眠そうな顔でアイスコーヒーを混ぜている。しんじさんは、冬でも冷たい飲み物が飲みたくなるそう。

「はあ、別にバイトに行くのは良いんだけど、寒いから外に出たくないんだよね」

「ホント寒そうですね。この辺りはビル風もあって、余計に寒いでしょうね」

私は、コートやジャンパーを着て、カフェの前を歩き交う人々を見ながらそう言った。ポケットに手を入れて肩を上げて歩いている人を見ると、暖かい店内にまで寒さが伝わってくる。

「しんじさんは、冬は苦手ですか？」

「うん。苦手だね。季節自体は嫌いじゃないけど、寒いのはどうも、やる気を削がれるというか、まあ、外出したくなくなっちゃうね」

「確かにそうですね。私も毎朝、布団から出るのが一苦勞です。でも私は、暑いよりは寒いほうが、まだいいかな」

「そうなんだ？ 僕はまだ暑い方がいいけどね。女の子って夏嫌いな子が多い気がするけどそうなの？」

「やっぱりみんな、日焼けを気にしたり、汗かくのを嫌がったりっていうのが大きいと思います。夏自体はイベントも多いし、冷えたジュースは美味しいし、いい季節ですよね」

「フフ。そうだね。ひなたさんは、夏にいつも水筒に何か入れて持ち歩いてたもんね。あれはジュースだったの？」

「よく見えますね。まあジュースの時もあり、お茶の時もあり、ですよ。そりゃ」

フフっと、しんじさんは笑って、アイスコーヒーを一口飲んだ。

「あ、そうだ。忘れないうちに渡しておくよ。はい」

しんじさんが渡してくれたのは、借りる約束をしていた本だった。

「ありがとうございます。やった。読みたかったんです。ハードカバーなんです」

「うん。これを買った書店には、ハードカバーしか置いてなくて、でもすぐ読みたかったからちよつと高いけど買ったんだ。でも、すごく良い本だったからハードカバーで買って良かったよ」

「それは楽しみです。帰ったら早速読もう。でも、すごく素敵な表紙ですね」

こちらに手をかざした女性の悲しげな顔が映っている。とても美しい表紙で、私はしばらくその表紙に見とれた。

「うん。僕もこの表紙はとても好きだね。僕はもう何回も読み返したけど、内容を読むと、この表紙の絵の感じ方も、きつと変わると思うよ」

「へえ。そうなんです」

「うん。この本の著者はシルヴィア・プラスっていう、アメリカ人の女性なんですけど、彼女はある心の病で、三十一歳の時に自殺したんだ。その彼女の、実体験が元になってる話なんだよ。ちなみに、この本のタイトルの『ベル・ジャー』って、どういう意味分かる？」

「うーん。ごめんなさい。分かりません。現役大学生なのに……」

「大学生だって分からないことは山ほどあるさ。『ベル・ジャー』は『ガラスの覆い』って意味なんだ」

「へえ。なんか、すごく文学的な表現ですね」

「うん。きつとシルヴィアにとって『ベル・ジャー』は、自分の抱える悲しみを表現する為のイメージとして、しつくりくるものだったんだらうね」

私は、しんじさんのこういうところがとても好き。知的なところじゃない。そうじゃなくて、他人の悲しみに感情があつて、そしてそれを、自分なりに理解しようとするところ。今、とてつもなく優しい表情をしている。

「ありがとうございます。私が読み終わったら、この本の話、いっぱいしましょうね」

「うん。返してくれるのはいつでもいいから。ゆっくり読んで。じゃあ、そろそろ行かないと」「あ、ホントだ。もう結構経ってたんですね。じゃあ、今日も頑張って来て下さい。子供達がしんじさんの登場を、今か今かと心待ちにしていますよ」

「いやいや、僕は一体何者なんだよ？ それに、子供たちは先生が来ない方が嬉しいよ。いつもお喋りに夢中なんだから。僕が教室に入ると、お喋りを止めて。ペンを持たなきゃいけない。でも、みんなちゃんとそれが出来るから、立派だよ」

「しんじさんは良い先生ですね」

「そう？ ありがとうございます。じゃあ、またね」

そう言うと、しんじさんは残っていたアイスコーヒを飲み干して、寒い寒い外の世界へ出て行った。

私はその日の夜。もう十二時だったけど、「ベル・ジャール」を少しだけ読もうと思い、リュックから取り出した。私は再び、その美しい表紙にしばらく見とれた。そして、この悲しそうな女性の顔から、色々なストーリーを想像した。私はいつも、読む前から内容を勝手に想像する癖がある。でもそれもまた、本を読む上での楽しみの一つなの。そうそう。さっき「シルヴィア・プラス」について、パソコンでちょっと調べてみた。彼女は三十一歳で自殺した時、既に結婚していて、寝室で二人の子供が寝ている間に、キッチンのガスオーブンに頭を突っ込んで自殺した。しんじさんが言っていた、シルヴィア・プラスの心の病というのは、「双極性障害」という病気だった。彼女は長年この病気に苦しんでいたそう。

私は、色んな思いに浸りながらその本を眺めていた。すると、本の間に隙間があることに気がついた。開いてみると、二つ折りにした白い紙があった。広げてみると、それは手紙だった。しんじさんが私に宛てた、手紙だった。

(ひなたさんへ

今日は雨が降っています。雨はいやだね。でも、雨の日に家で本を読んだり、映画を見たりするのはとても好きなんだ。なんか特別な感じがして、凄く楽しい。あ、そうそう。この前、ひなたさんが好きって言っていたあの「道」って映画を見たよ。凄く良かった。正直感動した

ね。ジュリエッタ・マシーナが足に鈴を付けて踊るシーンが特に良かった。僕はもう、彼女のファンだよ。今度は……」

『ブー、ブー』と、私のスマートフォンが鳴った。私はなんだか妙に驚いて、焦って手に取った。すると、しんじさんからのメールだった。

『これから、行ってもいい？』

なんだろう……でも、こんな時間にこんなメールは、初めてだった。

『はい。もちろん、大丈夫ですよ。駅まで迎えに行きますね。着きそうになったら教えて下さい』そう返信した。

なんだろう。一体どうしたんだろう？ まださっきの手紙も、最初しか読んでいないけど今から来ることと、何か関係があるのかな？ いや、とうかそもそも手紙は、私に渡すつもりで本に挟んでいたのか、それとも、挟んだまま忘れて渡してしまったのかも分からないでもとにかく、何か妙に心配だ。私は、じっとしていられなくて、部屋着を脱ぎ捨てると、急いでジーンズと、適当な長袖のシャツを着て、その上にコートを着た。そしてアパートを出ると、駅に向かって歩き始めた。すると、またすぐにしんじさんからメールが入った。

『いや、大丈夫だよ。アパートまでの道は覚えてるし、部屋で待っていてくれれば』

私は、歩くスピードを少し緩めて、歩きながらメールを返信した。ホントはこんなマナーの悪いことは、するべきじゃないけど、結構焦っていたんだと思う。

『ごめんなさい。実はもうアパート出ちゃったんです。だから、改札を抜けた所で待ってます』と返信。

『分かった。僕もすぐに着くから』

すぐに駅に着いた。私は改札前で、様々な予感と戦いながら、しんじさんを待った。時刻はもう深夜十二時半。駅の周りにはほとんど人はいない。寒くて、吐く息が、白くなって出て行くのを、何回も見ていた。それから十分も経たないうちに、しんじさんは到着した。

「やあ、ホントにごめんね。急に」と微笑しながら、しんじさんは言った。

「いえ、全然いいんですけど、ちょっと……何かあったのかと、心配になりました」

「うん。ちよつとね。ホントは、家で大人しく寝てるつもりだったけど、やっぱちよつと、話を聞いてもらおうと思って」

「そうなんですか……じゃあ、とりあえず私のアパートまで行きましょうか」

そして、私達は歩き始めた。

「やっぱり夜中は、寒さがやばいですね。寒すぎですね」

「うん。寒いね。やっぱり冬は、僕は苦手なんだと思う。冬が来る度に思うね。気持ちも寂しくなっちゃうし」

「そう……かもしれないね」

「寒いとき、つい考え事に耽っちゃうんだ。どこかにスイッチがあって、時々パチッとオフに出来たらいいのにね」と、微笑を浮かべて言った。

「いいですねそれ。私も欲しいです」

「でももし、オフの状態がすごく心地よかったりしたら、もう、元に戻りたくなくなるのかな？」

「んー、そんなことは無いと思いますよ。どこまでオフになるのかってこともあると思いますけど、何だかんだ、人は考えたい生き物なんだと思います」

「……そうだね。そうかもしれない。考えても考えても、事態は変わらないことの方がほとんどなのね。どうしてだろうね。おかしい話だね」

「フフ、そうですね。どうしてでしょうね」

それから数分は、私達は特に何も喋らずに、もくもくと歩いた。私は、その何とも言えない雰囲気心地よかった。この後きつと、良くない話を聞くことは分かっていたけど、アパートに着くまでの数分の間。この時間だけは、隔離されたように、ポツンと存在していた。夜の空気は冷たく、私たちの歩く音や、虫たちの鳴く声が、やけに耳に入り込んでくる。その全てが、気持ちいい……。

アパートに着き、私の部屋202の扉の前に立った。

「ちょっと待って下さいね。鍵開けますから」

私は、コートのポケットから鍵を取り出して、鍵穴にさし込み、回した。

「はい。じゃあ、どうぞ」

「ありがとうございます」

「コートとかカバンは、適当な所に置いて大丈夫なんで」

しんじさんが、私の部屋に来たのは初めてではない。何回か来たことはある。でも、こんな夜中に来たのは、初めてだった。だから家に泊まることも、初めて。

「何か、暖かいものを入れますね。コーヒーか、ココアだどどっちがいいですか？」

「じゃあコーヒーで。あ、やっぱりココアの方が、今は飲みたいかな」

「はい。分かりました。じゃあ私はコーヒーにしよう」

ケトルでお湯を沸かし、牛乳を電子レンジにかけた。その間にコップと粉を用意した。でもまだ手が冷えていて、思ったようには、動いてくれなかった。

「ああ、手が、もう自分の手じゃないみたい」

「ひなたさん。冷え性なの？」

「そうですね。わりと、そうです」

私は、温まった牛乳にココアの粉を溶かしながら、そう答えた。

「大変だね。夜なんて足の指先が冷えると、辛いよね」

「そうなんですよね。もうホントに……はい。ココアできましたよ。どうぞ」

「ありがとうございます。ココアなんて、何年ぶりに飲むだろう」

「ココアは、おいしいですよー。特に久しぶりだと美味しいと思います」

しんじさんは一口すすり、大きくため息をついた。すごくホッとしたような顔だった。長い緊張からとかれて、やっと落ち着ける場所にたどり着いたような……そんな感じ。私の部屋がその役割になるのなら、とても、嬉しいことだ。

そしてしんじさんは、あったことを話してくれた。先ほど塾で、ある女子生徒の頭を撫でたそう。普段あまり勉強の出来ない子で、その子が、今日はとても調子が良かった。しんじさんは、褒めて頭を撫でた。撫でたというか、ポンポンと叩いたくらいだという。しかし帰宅したその子が、母親にその事を言うと、母親はセクハラだと激怒し、クレームとなった。そして塾側は、地域に顔向けのできる処置として、しんじさんを退社させることにした。

しんじさんは笑っていた。笑いながら、その事を話してくれた。「その子を初めて見たとき初恋の子に似てると思った」と言った。

だったらそれくらい……いいじゃない。頭くらい、さわらせてやればいいんだ。

私は気がつくとも、見知らぬ港に立っていた。そこはとても綺麗なところで、透き通った海の水平線が、どこまでも続いていた。大きい船や小さい船が、右に行ったり、左に行ったりしながら、泡を立てて走っている。私は、ふと自分の手のひらを見た。すると自分の手が、いつもよりも白く、透き通っているように思えた。この綺麗な手が……これが、私の手なんだろうか？

「ねえ。お姉ちゃん？ ひな姉ちゃん？」

突然声が聞こえた。左を見ると、少年がそこに立っていた。歳は、十歳くらいだろうか。細くて、綺麗な顔をした少年で、とても可愛かった。私の服を引っ張っている。

「ねえ、ひな姉ちゃん。何をポーっとしてるの？ 海に、何か見えたの？」

「ああ、ごめん。そうじゃないの。ただ、こんなに綺麗な海って。初めて見たから……」

「……何を言ってるの？ ここには、ずっと昔から何回も来てるじゃない？ どうしちやったのさ？」

「あ、そうか……そうだ。そうだったね。ごめんごめん。ポーっとしちゃって」

私は何故か、その少年の言うことに納得した。そうだ。私は何度もここに来たことがあるし、昔からこの街に住んでいたんだ。

「じゃあ、早く行こうよ。みんなが待ってるよ」

「え？ みんな？ みんなって？」

「ホントに今日は変だね。今日は、ひな姉ちゃんのお祝い会だろ？」

「あ、ああ、そうね。お祝い会ね」

「そうだよ。この前プロポーズされて婚約したばかりなのに、もっと幸せそうな顔しなよ」
「うん。その通りだね。でも、ホントはとても幸せだよ。私は、あまり上手く表情に出ないだけ」

そうだ。私はつい先日婚約したばかりだった。でも、相手のことは一切思い出せない。一体相手は誰なんだろう？

「じゃあ僕が、パーティー会場まで案内するから、ついて来てね」

「うん。ありがとう。しんちゃん」

私は、その少年をそう呼んだ。そうだ、この少年の名前は「しんじ」だ。

私達は港から離れ、海沿いの防波堤を歩いた。

「ねえ、お姉ちゃん？ みんなサプライズをたくさん用意してるんだよ。内容は言っちゃダメだって言われているから、言えないけど、気になる？」

「うん。とっても気になる。ちょっとだけ教えてくれない？」

「ダメだよ。怒られちゃうもん。それに、僕もサプライズを用意してるんだよ。もちろん僕のもまだ、内緒だけだよ」

「へえ、しんちゃんが用意してくれたんだ？ それは楽しみ。一番楽しみかもしれないな」

「ホントに？ でも、すごく喜んでくれると思うよ。だってずっと前から、このことばかり考えてたんだから」

「へえ、嬉しいな。しんちゃんは優しいんだね」

「別に優しくなんかないよ。こんなのは優しいなんて言わないよ。優しいっていうのはもっと……なんか、違うものだよ」

「そう？ 違うものって、例えば、どんなもの？」

「この前、僕がいじめられてる時に助けてくれた。ひな姉ちゃんみたいな人のことを言うんだよ」

「私が助けた？ しんちゃんを？」

「そうだよ。いつも助けてくれるじゃない？ でもホントはみんな、僕がひな姉ちゃんと仲良くしてるのが、羨ましいだけなんだ」

私が、助けた？ いじめっ子の手から？ そんなこと、私が出来るわけない。弱虫で内気で、人の目もマトモに見て話せないこの私が。でも……しんちゃんがそう言うなら、ホントのことなんだろうか。

「僕も、だから今日は、いつもの恩返しをしたくて、サプライズを用意したんだ。姉ちゃんが喜んでくれるなら、僕も嬉しいんだ」

「ありがとう。しんちゃんみたいな子が友達で、私はホントに幸せ。これからも仲良くしてね」

「もちろんだよ！ 僕も、ひな姉ちゃんが友達で良かった。でも歳が離れているのが悲しい。

僕は大きくなったら、ひな姉ちゃんにそっくりな人と結婚するんだ」

「そうなの？ でもきつとしんちゃんは、大きくなったら凄く男前になると思うし、きつと

私よりもずっと可愛い女の子が、周りにいっぱい現れると思うよ」

「僕は、顔なんて気にしないよ。優しい人がいい。姉ちゃんは、僕の知ってる人の中で、一番優しい人なんだ。みんな知らないけど、僕はよく知ってるんだ。僕は、誰よりもよく知ってる。お姉ちゃんはいつも人のことばかり気にしてる。自分のことじゃなくてね」

「ありがとう。そんな風に言ってくれる人って、なかなかいない。大人になると、みんな本心を隠してしまうようになるから。本心を、何か当たり障りのない理由で、覆い隠してしまうの。ほとんどの人がそうになってしまうんだ。でも、それが当たり前で、大人として立派なことなの」

「そうなの？ でもそれって、すごく悲しい気がする」

「うん。私もそう思う。でも、それが普通なの。そうならない人や、そうなれない人は、周りから距離を置かれてしまうの。いつまでも子供だって、言われてしまうの」

「どうして？」

「……どうしてだろうね。私にも分からない。でも、そんな人の中にこそ、本物の悲しみや、温かみを持っている人がいるものだと、私は信じてるの」

「僕も、そんな人になるよ」

「ううん。別に、そう言ってるわけじゃないの。確かに、そういう人に対する尊敬を私は持つてるけど、でも、そういう人達の運命は、とても辛く、耐え難いものになってしまいがちな。先の見えない暗闇が何年も続いたりするの。そんな状態が長く続いてしまうと、だんだん……」

「だんだん？」

「……ううん。何でもない。でもね。よく聞いてね？ しんちゃん」

「うん、聞くよ、ずっとちゃんと聞いてるよ」

「一番大切なことは、幸せに生きることなの。自分自身が、幸せであろうとし続けることなのわかる？」

「僕は今、幸せだよ」

「うん。私もとっても幸せ。だから、この気持ちを忘れないでね。自分が幸せでないと、目がどんどん悪くなっていくの。あまりにも悪くなると、なかなか元に戻らなくなって、友達がみんな、見えなくなってしまうの。すぐ近くにいたとしても、分からなくなってしまふ。だから一人じゃないのに、いつも一人でいるような気持ちになってしまう。それって……それって凄く、す……ごく、辛いことなの」

「お姉ちゃん。どうしたの？ 泣かないで」

「え？ あ、ホントだ。ごめんね。どうしちゃったんだろう」

私は、自分でも気がつかないうちに、涙を流していた。

「ごめんね。今日は、せっかくの、お祝いなのに」

「いいんだよ。別に。ひな姉ちゃんは謝りすぎなんだよ。港からここに来るまでに、もう何回も謝ってるよ。数えてれば良かった。多分、十五回は言ったね」

「えー。そんなに言ってるないよ。いくらなんでも」

「それくらい、言ってるってことだよ」

「あらあら、それはどうも、すみませんでしたね！ しんじさん！」

「『すみません』は、一回目だから許してあげる」

「フフ、ありがとう」

「ほら、もうすぐそこだよ」

そう言っしてしんちゃんは、木造で、オレンジ色の屋根の家を指差した。その家を私は知っている。何度も訪れたことがあるけど、一体誰の家なのか、やっぱり思い出せない。

「綺麗な家ね。いっぱい話したから、あつという間に着いちゃったね」

「うん。あ！ そうだ。お姉ちゃんは、ちよつとここで待ってて」

そう言っとしんちゃんは、家の玄関の方に駆けて行った。私は庭で、一人ポツンと取り残された。

「あ、お姉ちゃん！ あのね！」

遠くから声がした。ふと見るとしんちゃんが、こっちに走って戻ってきている。

「あれ？ どうしたの？」

「あのね、さっきお姉ちゃんが泣いたこと、誰にも言わないから。安心してね」

「……うん。知ってるよ。ありがとう」

「じゃあ、待っててね。すぐ戻るから」

そして、再び玄関に駆けて行き、今度こそ家の中へ、しんちゃんは消えた。

私はこの世界が好きだった。深呼吸をすると空気が気持ちいい。胸の奥にまで、新鮮な風が入ってくる。海沿いのこの街が私の生まれ育った街で、ここにはたくさんさんの友達がいる。これから、私も含めたくさんの人が、いろんな地に移り住んで、それぞれの新しい生活を営んでいくことだろう。それが、すごく不思議なことと思えた。私はこの先、どんな景色を見ながら生きていくことになるだろう。

目が覚めると、夜中の三時で、そこは紛れもなく私の住むアパートの、私の部屋だった。なにかとても素敵な夢を見た気がする。でも全く思い出せない。そうだ。それより今日はしんじさんが泊まっているんだ。私は様子を見ようと、しんじさんが寝ている辺りの暗闇に、目を凝らした。すると、彼の体が小刻みに震えているのが見えた。なにか怖い夢を見ているのかと思ったけど、そうじゃなかった。しんじさんは、声を殺して泣いていた。

私は驚いたのと同時に、色々と考えてしまった。もしかして毎日こうして眠れずに泣いていたのかな？ 彼を苦しめているのは何だろう？ 私に助ける術はないのかな？ どうしてこんなにも良い人が悲しまなきゃいけないんだろう？ そう考えているうちに、私も泣きそうになった。何だか悲しくてたまらない気持ちになってしまった。私は彼の手を握ろうと思って、少し上体を起こして、彼の布団の中に手を入れた。彼は驚いて手を引っ込めた。でも私は更に手を伸ばして、今度こそ彼の手をつかんだ。彼は、私の手を離そうともせず、握り返そうともしなかった。ただ力なく、私の手の中に存在していた。

私は彼の為に手を握ったわけじゃない。私は寂しくて仕方なかった。誰かの体温が欲しかった。しんじさんはその事を分かってくれたかな。いや、でもそんな事どっちでもいい。本当は彼の布団に入って、もっと全身をくっつけたいけど、そんな優しさを見せつけるようなことは、しんじさんは、嫌がるかもしれない。私は何か喋りかけたいと思ったけど、それは難しいことだった。今なにか喋ってしまうと、この繊細な空間にひびが入ってしまう気がする。それがとても怖かった。

しんじさんは、私に手を握られても何も言わないでいる。今、一体どんな気持ちなんだろう？ でもやっぱり私が何とかしなきゃ。もう逃げたくない。そして私は、2, 3秒の間に頭をフル回転させた。しかし、私は、頭の使う部分を間違えたのだ。私の放った言葉は。

「ラーメンでも食べに行きませんか？」

これはもう、ひびどころではなく、そのセンチメンタルな雰囲気叩き割ってしまった。この間違いは私も認める。これは確におかしい。でも、それを聞いたしんじさんは、泣きながら笑っていた。そして彼はゆっくりと深呼吸をして、こう言った。

「駅の裏に、美味しいところがあるんだ。でも、さすがにこの時間は閉まってるね」

「あ、そっか。そうですね。残念」

「うん。コンビニのカップ麺でも、買いに行く？」

「はい。そうしましょう。でも、出来れば袋麺のほうがいいです」

私はなぜこのタイミングで、そんなどうでもいい事を言ったんだろう？ 彼よりも私のほうが動揺していたのかもしれない。私はまだ彼の手を握ったままだった。お互いの汗でベトベトになっている。でも、その手を離すのが死ぬほど怖かった。彼のどこかにさわっていないと、居なくなってしまう気がしたから。

「じゃあ、起きなきゃ」

そう言っつて、彼は手を離そうとした。でも、私はしっかりと握って、離すことを許さなかった。

「ん、どうしたの？」

彼はそう言っつて私を見た。彼はいつの間にか泣き止んでいた。ああ、ダメだ……今度こそ、今度こそ私の方が泣いてしまう。泣きそうでも、声も出せない。どうしよう。どうしたらいいの……

「大丈夫？」

彼はそう言いながら、俯いている私の顔を覗き込んだ。その時のしんじさんは、バカみたいな顔だった。

「大丈夫？ 何を言っているんですか？ 大丈夫じゃないのはあなたの方でしょ？ どうしてですか？ どうしてそんな風になってしまうんですか？」

泣きながら放った、ギリギリ出た言葉だった。

「……」

「あなたにどんな過去があったって、私はあなたを嫌いになったりしません。あなたが誰に嫌われたって、私はあなたの味方なんですよ」

私は左手で自分の涙を拭いた。右手は彼を捕まえている。

「今も、一人なんですか？ 私は今あなたと一緒にいるつもりです。あなたは今この瞬間も一人なんですか？」

「そんなことない……今は、そんなに寂しくもないよ」

「じゃあもし話せるなら、話してくれませんか？ さっきどうしてあんなに辛そうに泣いていたんですか？」

彼は口を開いては閉じて、また開いては閉じてしながら、キョロキョロとしていた。まるで声の出し方が分からなくなった人のようだった。きっと今彼は、どうにかして心を開こうとしてくれている。自分と戦っているんだ。

「自分でも、よく分らない。どうしてもなにか分らないけど、みんなが僕の悪口を言ってるんだ……それで……」

「大丈夫ですよ。ゆっくりでいいんで」

「僕は……大学の友達にも、この友達にも、嫌われてるんだよ。誰からも連絡は来ないし、みんな僕のことを、初めから居なかった人間のように思ってるんだ」

「はい」

「それで、僕はいつかお金持ちになって、豪邸に住んで、綺麗な奥さんをもらうんだ。そしてらみんな悔しがらるだろ？ バカみたいだけど、そんな事考えないと、やってられないんだ」

「そんなことないですよ。私も、似たようなことを思う時があります」

そう伝えたけど、彼の表情は変わらなかった。

「僕は、僕はね。ホントに自分でもどうかしてると思うけど、人間がみんな、軽くて冷たい石で出来ているように見える。いつもじゃないけど、よく本気でそう思うんだ。あの物体の中で血が流れてるなんて、とても想像出来ない」

「それは、自分以外の人がそうなんですか？ それとも、しんじさん自身も石で出来てると思うんですか？」

「多分、僕も石で出来てる。みんなと同じだ。でも僕はそれを自覚してるけど、みんなは自覚してないんだ。みんな、自分のことを立派で貴重な存在だと思ってるんだ。バカバカしいよ」

「じゃあ、私はどうですか？ 私も石で出来てますか？」

「君は違う。ひなたさんがそんな風に見えたことは一度もないよ。時々そういう人もいるんだ」

「私も、しんじさんが石で出来てるようには見えません。しんじさんの中に血が流れてるのが分かります。とても上手に想像出来ますよ」

「ありがとうございます。でも僕は、君が思うような人間じゃないよ」

「それは私だってそうです。私もいつか、しんじさんの目に、石として写ってしまう日がくるかもしれない。それが怖くてたまらない時があります」

「もし僕が、君を見て石に見えてしまう日が来たら、それは、僕が本当にダメになってしまった時だよ。もう、どうにもならなくなった時だよ」

「じゃあ、今ならまだ間に合うってことですね？」

「どうだろう。よく分からない。僕にはもう、まともに考える頭が残ってないんだと思う」

「……ねえ、しんじさん？　お願いがあります」

私は、心を奮い立たせた。

「病院に行きましょう。私も一緒に行きますから」

「それは、やめておくよ」

彼はそう言われるのを予測していたかのように、すぐに断った。

「お願いです。心からのお願いです。私がお医者さんなら良かった。今ホントにそう思ってます」

「こんなこと、君に話すのにも凄く大変だったんだ。分かるだろ？　見ず知らずの偉そうな顔したおっさんに、話すなんて出来ないよ」

「話せなくても行かなきゃダメです。行かないというのなら私は……」

「私は？」

「私はもう……しんじさんに……しんじさんに会いたくはありません。どんな顔で会っているのか、分かりませんから」

「……それは困るな。でも、君にそんなこと出来るとは思えないけど」

「私のこと見くびってますね？　私はとても頑固なんですよ。しんじさんに負けないくらいの頑固者です」

「でも……」

彼は迷っている。必死に自分を見つめて、正しい決断を下そうとしている。

「ねえ？　その前に、ちょっといい？　ずっと聞きたいことがあったんだ」

「なんですか？」

「動物園の時、僕がおかしくなって、君に色々言っちゃった時。覚えてる？　あの時なんで僕に反論しなかったの？　だってひなたさんは、動物の気持ちが分かるんだろ？　だったら

あの時、何か反論が出来たと思うけど」

「もちろん覚えてますよ。そうですね。動物達は色々でした。幸せそうな子も悲しそうな子も、両方いました。その辺は人間と同じです。悲しんでる子は、それが檻のせいとは言ってなかったけど、少なくとも、自分の飼育係の人間を嫌ってる子は、いませんでした」

「そうなんだ……」

「はい。でもあの時私は、動物じゃなくて、しんじさんの心を、知りたかったんです。あんな事を急に喋り出すなんて、きつと心に、何か寂しさのようなものがあると思っただんです。分からないけど、そう感じたんだと思います。だから、最後まで話を聞くべきだと思っただんです。ホントに見下したりなんてしてません。いや、分からないけど、少なくとも自覚は無かったので、許して下さい」

まあ、ホントは、怖くて言い返せなかったっていうのも、あるけど。

「許すも何も、あれは完全に僕が悪かったんだ。あの日帰ってから死にたくなっただくらいだよ。でもさ、今まで、僕があんな風になった時、他の人はみんな優しくはしてくれなかったよ。怒ったり、意味が分からないと不思議なモノを見るような目で見たり。みんなそうだった。謝ったのはひなたさんが初めてだったんだ」

「そうだったんですか……私は、しんじさんみたいに頭が良い訳じゃないけど、こんな風に思うんです。人の話す言葉には、必ずその裏にメッセージがあるって。言葉の内容じゃなく、その裏に本当に伝えたい事があるって。そしてそのメッセージは、本人よりも、周りの人の方が気付きやすいものなんです。だから私達は、共存しないと幸せになれないんです。一人でも強く生きられる人なんているのかな？ 私には理解できない。だって一人だと、誰も自分の本音を教えてくれないし、自分も、誰の本音にもふれることが出来ないんですよ」

しんじさんは何も言わない。真剣に聞いてくれている。

「しんじさんはきつと、今までたくさんの人に誤解されてきたんだと思います。言葉そのものを捉えるということは、誤解に繋がります。でも、言葉は心と違って、共通の意味を持っていて、目につきやすいんです。だから、本当に伝えたいメッセージが霞んでしまうんです。しんじさんが悲しいのは、きつとそのせいだと思うんです。私は、しんじさんの力になりたかった。ずつと、何か出来ることがないか考えていました。でも私は何も出来なかった。あの動物園の時も、いじめられた話をしてくれた時も、私にもっと勇気があれば、しんじさんの心を、もつと楽にしてあげられたかもしれない。いつもいつも、自分の不甲斐なさに嫌気がさします。私には何も出来ないんだって。多分この先も、私は変わらないんだって」

私は一生懸命喋った。今まで色んな場面で、目の前のことから逃げてきた私は、ここぞとばかりに、思いを打ち明けた。でも、私にも、こんなこと出来るんだな。

「あの……すみません。なんか途中から自分の話になってしまっって」

「いや、そんなことないよ。ありがとう。君にこんな一面があるとは思わなかった。君みたいな人がもつとあればいいのに。ホントにそう思う」

「ありがとうございます。そんなこと言われたのは初めてです」

「みんな、見る目がないんだね」

「フフ、どうでしょうね」

しんじさんは、また俯いて黙り込んだ。でもここで、喋りだすべきが、私ではないことは、何となく分かった。私には、ただ、待つしかなかった。

「うん……僕は多分、病氣、なんだろうね。自分でも、分かるよ。よく分かってるよ」

「でも、しんじさんはしんじさんです。その人がどんなに変わっても、変わらない何かがありと、一番奥にはあると思うんです。だから、しんじさんは、しんじさんです」

「僕は、どうすればいいのかな？」

「しんじさんは、自分の心の声に、耳を傾けなければいけないと思います。それは、いつも聞いている、誰かを批判する声や、誰かに批判される声じゃありませんよ。そんな浅い部分の声じゃなくて、もつと先にある心の声です。それが何よりも大事だと思います。でも私はバカだし、しんじさんの心を知ったとしても、その後どうしていったらいいか、分からないと思うんです。私はしんじさんに、元気になって欲しいんです」

「ありがとう。じゃあ……分かったよ」

「えっ？ 分かった？ 分かったとは？」

「僕も、もう人に迷惑はかけたくないんだ。そうした方がいいなら、病院に行くよ」

「え、ホントですか？ 嬉しい。ありがとう。カッコイイですよ」

私は、また泣きそうになった。でも、今度の涙は、さつきとは逆の意味のやつなんだ。

「うん。じゃあ、僕からも一つお願いしてもいいかな？」

「はい。なんででしょう？」

「自分のことを、バカだとか、頭が悪いとか、そんなことを言うのは止めなよ。ひなたさんは、僕なんかよりもずっと頭が良いよ。自分で気づいてないようだけど、これは本気で言ってるんだよ」

「は、はい。分かりました。言いません。でも癖なので、また言ってしまった時は注意して下さい」

「うん。いいよ。でも君はホントに変わってるよ。河原で会った時からずっとそう思ってた」
「それは光栄です。まだまだこの先も、私はしんじさんについて回りますよ」

私は、彼が泣いていたあの時からずっと、彼の手を握りっぱなしだった。もうホントに汗でグッショリだ。でも、もう今なら離しても大丈夫だと思つて、ゆっくりと手を開いた。そうして彼と私は、また一つ一つになった。それにしても、しんじさんの手は思っていたよりずっと暖かかった。私の手よりもずっと暖かかった。それを知れて、私は幸せでたまらなくなつた。

きつと今私は、この世で一番幸せな生き物だった。そして彼の顔も、この世で一番幸せな生き物の顔だった。しんじさんも私も、お互いが、今持っているモノの中で一番見られたくない事実を見せ合つた。私は、ずっと立ち入ることの出来なかつた彼の部屋に、入ることが出来たんだ。嬉しい。きつと彼は、寂しくて寂しくて、この部屋で何度も首を吊つたんだと思う。そして誰にも気づいてもらえなかつたんだと思う。でも今は、この部屋に悪魔はいない。とりあえず今はいない。いつ帰ってくるか分からないけど。もしかしたら明日にはまた帰ってきて、外から扉をノックするかもしれない。彼がその扉を開こうとしても、私が守つてあげる。どんな事をしてでも守つてあげる。

私が話したいのは、これで全てです。あの次の日には、しんじさんは病院に行くことを再び拒み、私もその時は折れました。それからしばらくして彼は、この世界からいなくなりました。自分の部屋で練炭を焚いて、睡眠薬も飲んでいたそうです。

それからしばらく、私にとっては、夢なのか現実なのか分からない日々が続きました。お腹が減らないのでご飯を食べないでいると、一ヶ月で十一キロ痩せました。友達が心配して私のお母さんに連絡してくれたそうです。そして、お母さんがアパートまで迎えに来てくれました。変わり果てた私を見ても、お母さんは笑っていました。今なら、あの笑顔の意味が分かる気がします。

一年が経った今でも、やっぱり全く平気なわけではありません。胸が苦しくなる日もあれば、彼に簡単に会えるように思えて、嬉しくなる日もあります。ただ、私をもっと女性として魅力的だったら良かったのかもしれないと思いました。もっと可愛かったらよかったです。そして、彼の生きる希望になれたのかもしれない。そんなことを考えるのはバカらしいけど、つい考えてしまうんです。

私は、彼の自殺を責めたりなんてしていません。お兄さんを白血病でなくしたユキさんは彼のことをどう思うでしょうか。生きてくても生きられずに死んでいく人の気持ちを知っているユキさんにとっては、自殺という行為は、もしかしたら許せないことなのかもしれない。でも、人が傷つくってことは、それぞれにちゃんと、それなりの理由があるのだと思います。ユキさんにも、しんじさんにも、私にも。誰にだってちゃんと。

それを誰かが、大衆的な道徳や、自分の経験だけで凶ろうとすることは、とても危ないことなのかもしれません……それに、私は知っています。しんじさんだつてホントは生きたかったことくらい。彼だつて生きてくても生きられなかった人の一人なんです。ただ違うのは、悪くなっていたトコロがたまたま、外から見ても分からないトコロだったんです。

しんじさんは今、元気になっているでしょうか？ 私はとても心配しています。あと彼は、私が元気なことを知っているでしょうか？ もう何も心配しなくていいんですよ。

時々、引き出しを開けて、動物園で撮った彼の写真をながめたりしています。彼の後ろに

写るハイエナはとても楽しそうです。檻の中だけど、とても幸せそう。しんじさんの顔は：日によって変わるんです。信じてもらえないかもしれないけど、ホントなんです。そして今日は、楽しそうです。良かった。明日もそうだったらいい。あ、あと、しんじさんにカフェで借りた本。「ベル・ジャー」もまだ引き出しに入っています。結局、この本の話は出来ませんでしたね。

そして、その本の間に入っていた私への手紙も、ちゃんと取っていますよ。でも、その手紙を眺めていると、次第に、引き出しを閉めることが出来なくなるんです。そして、泣く日もあるし、泣かない日もあります。でも、それでも私は、元気に暮らしています。だからしんじさんも、元気なら元氣と教えて下さい。もし、寂しいのなら寂しいと教えて下さい。私はあなたみたいに頭が良くないから、言ってくれないと分からないのです。あ、ごめんさい。

今日はもう寝ますね。明日は午前中から、河原に行きます。そう、彼岸花を撮りに行くんです。今年はまだ見に行っていないから。どの花も立派に立っていることを願って行きます。でもやっぱり、あんなに赤い花が河原に咲くなんて、ホントに不思議です。

ねえ、そう思いませんか？ しんじさん。



〜エピソード〜

ひなたさんへ

今日は雨が降っています。雨はいやだね。でも、雨の日に家で本を読んだり、映画を見たりするのはとても好きなんだ。なんだか特別な感じがして凄く楽しい。そうそう。この前、ひなたさんが好きって言ってたあの「道」って映画を見たよ。凄く良かった。感動したね。ジュリエッタ・マシーナが足に鈴を付けて踊るシーンが特に良かった。僕はもう、彼女の大ファンだよ。今度は、もう一つ言っていた方の「リトル・ダンサー」も見てみようかな。こんな素敵な作品を教えてくれてありがとう。僕はいつも、映画も本も、暗いものばかり見てしまうから、時々こういう感動する映画にふれて、心を洗った方が良いのかもしれない。ひなたさんが教えてくれなかったら僕は、生涯この映画を観ることはなかったと思う。本当にありがとう。

いつも、心配ばかりかけてごめんね。どうも、調子が安定しないんだ。今はわりと元気だけどね。だから今のうちに手紙を書こうと思ったんだ。またいつおかしな事を言い出すかも分からないから。

僕は一年半前。東京のあるアパートで、一度は死にかけた。前に話したよね？ あの時に来僕はもう、元に戻れなくなっちゃったんだ。一人で部屋にいと、壁や天井に圧迫されて、息が出来なくなったりする。かと思えば、全てが上手くいくように思えて、笑いが止まらない時がある。その二つの世界を、何度も行ったり来たりしている。これって凄く辛いことなんだ。もう、自分の精神が、全く別の場所に行ってしまうって、二度と身体に戻ることがない気がするんだ。

あの事故のあと、岡山に連れて帰られて、そして三ヶ月間は部屋にいた。多分その間に色々なことを忘れてしまったんだと思う。僕は大事な事だけは、すぐに忘れてしまうんだ。どうでもいい知識だけは、隅々まで覚えるくせにさ。そしてある日、泣きながら、自分自身にむけて手紙を書いた。僕のことを本当に知っているのは、やっぱり僕だと思ったから。丸一日

かけて書いたんだよ。だから凄く長い文章になった。そして書き終えると、ちよつとだけ、外に出てみようって気になれたんだ。

僕が通っていた中学校のすぐ側には大きな川が流れていて、その河原が僕は好きだった。よく、友達とふざけながら帰った思い出があるんだ。だからそこに行くことにした。学校の一番近くにある水鳥橋という橋のすぐ横で、腰をおろして何となく向こう岸を眺めていた。そこで、橋の下で休んでいる女の子を見つけたんだ。僕は久しぶりに人の姿を見た。もちろん両親は家にいたけど、両親以外では、ホントに久しぶりだったんだ。そしたらその子は、橋の下に座り込んでリュックから水筒を出した。そして中の飲み物を飲むと、幸せそうにため息をついた。それが、もう素晴らしく良い表情だったんだ。「誰の存在も気にしないでいられる幸せ」って感じかな。きつと、凄くいい子なんだと思った。そんなことくらいで、分かった気になる僕もおかしいけど、でもやっぱり、間違ってたなかったよ。

気持ち悪いと思われるかもしれないけど、僕はその姿をしばらく見ていた。するとその子は、僕の存在に気づいてこつちを見た。だから僕は慌てて目をそらした。そして向こう岸を眺めるフリをしたんだ。そしてそのあと、その子は水筒を置いたまま、反対のほうへ歩いて行ってしまった。

僕はそれを見て思ったんだ。きつとこれは、神様が僕に与えてくれた仕事だって。「あの水筒を、あの子に返してやりなさい」ってことだと思った。だってあの水筒のおかげで、あの最高な表情が見れたんだから。あの水筒とあの子はセットで、その時の僕にとって、何よりも無くしたくないものだったんだ。そして僕は、ちゃんと水筒を手渡した。そうだよね？それが、三ヶ月ぶりに僕がやった仕事だった。

ちゃんと仕事が出来ると、素敵なことなんだと思ったよ。ホントは仕事なんてもの嫌いだったけどさ。理不尽な事が多過ぎるし、みんな仕事のせいで、病んだり、洗脳されたりしちゃうだろ？でも、ちゃんと仕事を続けていられるってことは、良い事なんだって思ったね。悔しいけどさ。

社会の中で、理不尽の中で、そしていやらしさの中で、その中で生きていけるっていうのは、幸せな事なんだ。だから、僕の一番得意な勉強を、子供達に教えてあげようと思ったんだ。僕の特技が人の役にたつって素敵だと思った。

ひなたさんが、あの時河原に来ていなかったら、あの時お茶を飲んでため息をつかなかつたら、あの時水筒を忘れなかったら、今の僕は無いと思うんだ。大げさだけど、命の恩人だと思ってるよ。人の命なんて、ゴミほどの価値しかないと思う時もあるけど、ひなたさんを見てみると、そんな事を考えてしまう自分が、すごく嫌になってしまう。だから僕も、自分の命の価値を信じてみようと思えたんだ。

深い悲しみは一度知れば十分なんだ。あとはどんな事があっても、幸せを求めるべきだ。しかも堂々とね。小さいものからでいいんだ。ほんの数秒で叶う幸せから、少しずつ探していけばいいんだ。どんな時だって次に何をすべきかは、自分をこれまで育ててくれた存在が、その大切な何かで、こつそりと教えてくれるんだから。その声は決して止むことなく語り掛けてくれる。でも誰にだって、その声が聞こえなくなる時がある。そんな時こそ、自分で自分を救ってあげる勇気を持たなきゃいけない。誰だって誰かの被害者だよ。僕だって、きつとひなたさんだって、あのあつしだってそう。悲しみがなくなることはない。憎しみが満たされることもない。だけど、それでも幸せになることは出来るんだから。さつきカーテンを開けたよ。窓も少しだけ開けた。今は机に向かってこの手紙を書いている。自分からそうしたんだよ。

こんなこと僕が言ったところで、あまり説得力ないと思うけど、ひなたさんにはなるべく楽しい日々を過ごしてもらいたいんだ。だからさ、ひなたさん。大勢の人の中で、周りと同じように笑えなくても、そんな自分を嫌いにならないでほしいんだ。それは、何も悩むようなことじゃないし、君のような人は、ホントになかないんだから。優しさっていうのは、人間の、いや、大人のもつ一番の取り柄だと思ってる。ひなたさんは多分、それを無意識のうちに理解しているんだよ。だからいつも、人の立場になろうと必死に考えてしまうんだ。

僕は、自分が病気だってこと、よく分かってるよ。でもこれから、少しずつマトモになっていくんだ。時間はかかると思うし、周りの人にたくさん迷惑をかけると思う。でも時々、幸せな自分の姿も見えるんだ。そういう時は決まって、色んな人への感謝の気持ちや、申し訳ない気持ちが込み上がってくるんだよ。こんな人間に生まれてしまっただけで申し訳ないって気持ちと、見捨てないでくれる事への、感謝の気持ちが。そんな時って、泣きそうになるよ。

多分、自分の心の声を聞けて、幸せだからだと思うよ。

プロフィール

なえしろ

・苗代ひなた 二十歳 女性 A型 しし座 大学三年生 写真部に所属している。
(何でも撮るが、主に動物を撮るのが好き)

趣味…塩系のお菓子を食べながら映画を見ること。(好きな映画は「リトル・ダンサー」)

「ショーシャンクの空に」「道」)

特技…動物の表情をみれば、考えてることが読み取れる。本人は「動物は喋ることができないから実際のところは分からない」と、言っているが、読み取る内容があまりに具体的で、普通の人は出来ない。

性格…真面目で優しいが、ひねくれた一面もある。自分の意見を言うのが苦手であり、人の話に合わせるのが上手。人の目を気にしすぎるところがあるが、周囲にはそのことはあまり認知されていない。逆にのほほんとしたイメージをもたれている。

つきみや

・月宮しんじ 二十二歳 男性 B型 てんびん座 早稲田大学中退後はフリーター

(塾の講師のアルバイトをやっている)

趣味…読書(古い海外文学が好き。歴史や哲学、心理学にも興味がある。でも他人に気取った奴と思われたくないので、人前では、普通の小説を読むようにしている)

特技…一度覚えたことはまず忘れない。天才的な記憶力の持ち主。テストで百点をとれない人が不思議でしようがないそう。

性格…頭が良く、わりと社交的であるが、しかし実際は、非常に内向的で、耐え難いほど悲観的な性格の持ち主である。物事を掘り下げて考える癖があり、どうしようもない事ばかりに悩んで、人と距離を置く癖がある。なかなか心を開くことがないが、信頼した相手に対しては、どんな事でも正直に話すようになる。